

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：34406

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00025

研究課題名（和文）『オプス・ポストウムム』の研究 - フィヒテ、シェリング、『エーネジデムス』との関係

研究課題名（英文）Study of Opus postumum: The Philosophical Relationship between Fichte, Schelling, Aeneidemus and Opus postumum

研究代表者

内田 浩明 (uchida, Hiroaki)

大阪工業大学・工学部・教授

研究者番号：90440932

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：晩年のカントの時期に台頭してくるフィヒテ、シェリング、そしてシュルツェ＝エーネジデムス等の哲学者がカントの『オプス・ポストウムム』に与えた影響を究明した。具体的には、カントが『オプス・ポストウムム』において二度のみ言及しているシェリング、繰り返し言及している『エーネジデムス』、そして一度も言及していないフィヒテとの哲学的な関係を究明した。その結果、理由は違えど、カントはフィヒテ、シェリング、シュルツェの主張に対してネガティブな考えを持っていたことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『日本カント研究』や『フィヒテ研究』に拙論が掲載されることにより、若手研究者も『オプス・ポストウムム』に言及する者が増え、後進の育成に寄与したと史料できる。

研究成果の概要（英文）：I researched the influence of philosophers such as Fichte, Schelling, and Schultze on Kant's "Opus postumum". By reading those texts, I investigated Kant's philosophical relationship with Fichte, whom Kant never referred, and Schelling, whom he mentioned only twice in "Opus postumum", and with "Aeneidemus", which he repeatedly mentioned.

The results revealed that Kant had negative views of Fichte's, Schelling's and Schulze's though.

研究分野：人文学（西洋哲学）

キーワード：カント 『オプス・ポストウムム』 フィヒテ シェリング シュルツェ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

カントの『オプス・ポストゥムム』(以下 OP) 研究は、特に海外では 1990 年以降、急速に進展している。しかし、同時代の思想家と OP との関係や影響を詳しく論じている研究は数少なく、とりわけ国内ではほとんど行われていない。そこで、ドイツ観念論の側からではなく、カントの OP に与えた影響という点から究明する。

2. 研究の目的

本研究全体の目的は、カントの晩年の草稿である OP について、カントとフィヒテの間に活躍した哲学者との関係も加味しながらフィヒテやシェリングとの思想的関係を究明することにある。

3. 研究の方法

研究方法としてはフィヒテとシェリングに加えラインホルトと『エーネジデムス』の著者であるシュルツェをとりあげ、彼らの公刊著作を中心に、『オプス・ポストゥムム』との比較考察を行う。

4. 研究成果

(1) 課題初年度にあたる 2018 年度は、カントの OP とイェーナ期のフィヒテ知識学、とりわけ「知識学への第二序論」との関係性を考察した。研究成果・業績としては日本フィヒテ協会の学会誌『フィヒテ研究』第 26 号における「フィヒテの『知識学への第二序論』とカント」、およびカント研究会における口頭発表「イェーナ後期『知識学への第二序論』におけるフィヒテのカント理解」、さらには日本カント協会の学会誌における Veit Justus Rollmann 著の Apperzeption und dynamisches Naturgesetz in Kants Opus postumum: Ein Kommentar zu "Übergang 1-14" の書評がある。

上記においては OP に若干言及したものの、カントの OP とフィヒテの「第二序論」との関係性を正面から論じた論考ではないものの、上記の助走と言える研究である。その際には、カントの OP とフィヒテの「第二序論」を真正面から論じ、カントの自己定立論を分析するかぎり、フィヒテからの積極的な影響はなかったことを結論づけた。また、OP に特有の「エーテル証明」(「エーテル演繹」とも呼ばれる)を主題にした研究書にかんする書評であり、シェリングの初期自然哲学との関係をも見据えることができた。

(2) 2019 年度の「研究目的」と「研究計画」は、シェリングの自然哲学を視野に入れながらカントの OP との比較考察を行うことであった。その研究計画に則り研究を遂行した。具体的には、これまでの研究を発展させるべくシェリング哲学との関係に関しては、とりわけ彼の『自然哲学に関する考案 (Idee)』等 (1797 年初版) をはじめとした自然哲学に加え、『超越論的観念論の体系』(1800 年) も加味しながら OP の読解に努めた。

その成果としては、シェリング協会主催の『日本シェリング協会大会』第 28 回 於 富山大学 2019 年 7 月 6 日の松山壽一氏とのクロス討論が挙げられる。当該の口頭発表では、いわゆるカントの「エーテル演繹 (Ätherdeduktion)」を含め、OP の初期から中期の草稿の概要をまず提示し、カントの「自己定立」や「直観概念」とシェリング哲学との差違について開陳した。より詳しく述べれば、カントの「自己定立論」は、フィヒテの「知的直観」を基礎に据えたシェリングとの「自己定立論」とは、表現こそ類似する(例えば、「英知的自我の感性化」などが挙げられる)ものの、別概念であること、およびシェリングがとりわけ有機体論に関してカントの『判断力批判』から多大な影響を受けているとはいえ、状況証拠からすれば最晩年のカントが「電気、磁気、化学」という最新の科学をシェリングほど積極的に自らの学説には取り入れていないこと等を明らかにした。

(3) 2020 年度は、まずカントの OP と初期シェリングとの関係を究明するべく、「日本シェリング協会」で発表した論考を彫琢し寄稿した。その際、OP の初期草稿である自然哲学にも論究し、前年度の発表原稿より研究範囲を広げつつ、しかも分かりやすいように加筆修正した点が特長である。

次に、ラインホルト、シュルツェの『エーネジデムス』ならびにフィヒテとカント哲学との関係を解明すべく、OP にも触れながら「日本カント協会」の共同討議(オンライン開催)において口頭発表を行った。限られた発表時間のなかで「カントと初期ドイツ観念論」という共同討議のテーマに即しつつ、ラインホルトと『エーネジデムス』に言及し、フィヒテと晩年のカント哲学との関係性を明らかにしたことが本口頭発表の意義である。

(4) 2021年度は、カントとラインホルト、および『エーネジデムス』の著者として現在知られているシュルツェを中心に研究を遂行した。2020年度に「日本カント協会」から依頼を受けた共同討議における口頭発表の原稿に質問・指摘された箇所等に加筆・修正を行い、「日本カント協会」の機関誌にて、その成果を論文の体裁で活字として公開した。

当該拙論では、上記口頭発表で指摘された点や報告者自身で改めたく思った箇所を加筆・修正しつつ、シュルツェの『エーネジデムス』におけるカント・ラインホルト批判の要点を確認したうえで、OPにおけるカントの言説について論究した。

(5) 2022年度は、『エーネジデムス』の著者として知られるシュルツェの、『エーネジデムス』以前の『哲学的な諸学問の摘要(Grundriss der philosophischen Wissenschaften)』〔以下『摘要』〕や『理論哲学の批判(Kritik der theoretischen Philosophie)』にまで遡り、シュルツェとカント OP の関係を中心に研究を進めるとともに、18世紀末から19世紀初頭のドイツにおける「観念論」ないしはそもそも「観念」のドイツ語訳に照準を定め研究を遂行した。

については、シュルツェの上記著作が各々2巻本の大著であり、かつ先行研究も少ないため、『エーネジデムス』との関係を成果物として当該年度にまとめ上げることができなかったものの、両著作における観念論やカント哲学に対するシュルツェの立場をおおむね理解することができた。一方、についてはOPについても注等で言及しながら、18世紀ドイツでは英語の idea が主として Begriff と訳出されていることを、共著『観念説と観念論』において文献的に証示した。

(6) 2023年度は、今日、『エーネジデムス』の著者として知られるシュルツェの著作のうち、我が国では殆ど扱われていない『哲学的諸学の摘要』(以下、『摘要』と略記)を中心にその内容とカント哲学との関係を探求すべく読解を試みた。研究成果としては、「カント研究会」における口頭発表がある。

二巻から成る『摘要』は、1788年に公刊された第一巻の大部分が「心理学」をテーマ(ただし一部「道徳学」も含まれる)となっているが、その叙述は感覚を基にし経験的性格を多分に帯びていること、および「アプリアリな総合判断」に重きを置くカント哲学とは相容れないことを明らかにした。また、1790年公刊の『摘要』第二巻は「形而上学」(『摘要』では「存在論」、「自然神学」、「超越論的宇宙論」に区分される)を主題としているが、すでに第一巻の段階でカントの「物自体」概念に批判的であったシュルツェは、「物自体」を前提するカント的な形而上学には否定的であることを述べようとした。

当年度の研究を通じて、『摘要』には『エーネジデムス』におけるカント批判に繋がる論点のいくつかを確認できたものの、カントの OP におけるエーネジデムスに対する文言と直接結びつけることはできないことも同時に明らかとなった。

5. 論文・著作、口頭発表から漏れ落ちる【書評】などの業績 〔書評等その他〕 計2件

内田浩明(単著)	Veit Justus Rollmann 著の Apperzeption und dynamisches Naturgesetz in Kants Opus postumum: Ein Kommentar zu "Übergang 1-14"	『日本カント研究』	2018年
内田浩明(単著)	松山壽著『シェリングとカント 『オプス・ポストウムム』研究序 説』	『日本カント協会』	2022年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 内田浩明	4. 巻 22
2. 論文標題 批判と体系－カント哲学と初期ドイツ観念論－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『日本カント研究』	6. 最初と最後の頁 96-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 内田浩明	4. 巻 28
2. 論文標題 カントの『オプス・ポストゥムム』と初期シェリング哲学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 シェリング年報	6. 最初と最後の頁 27-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32297/schellingjahrbuch.28.0_0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 内田 浩明	4. 巻 26号
2. 論文標題 フィヒテの『知識学への第二序論』とカント	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 フィヒテ研究	6. 最初と最後の頁 37-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 内田浩明
2. 発表標題 批判と体系：カントと初期ドイツ観念論の差異
3. 学会等名 日本カント協会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 内田浩明
2. 発表標題 カント『オプス・ポストゥムム』とシェリング
3. 学会等名 シェリング協会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内田 浩明
2. 発表標題 イエーナ後期『知識学への第二序論』におけるフィヒテのカント理解
3. 学会等名 カント研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 佐藤義之・松枝啓至・渡部紘一（編著）内田浩明他著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 168
3. 書名 『観戦説と観念論』（うち第5章「カントの超越論的観念」（p.83-p.97）を担当）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------